『南山神学』46 号（2023 年 3 月）pp. 25-43.

アリマタヤのヨセフ

—4 つの福音書における文学的提示—

ヤヌシュ　クチツキ

はじめに

４つの福音書の著者にとって，中心となる英雄がナザレのイエスであることは疑いようもない。イエスの教えと行いは，ユダヤ主義そのものを永久に変えただけでなく，それは全世界の真の変革の始まりを示したのである。イエスに関する証言を書き記すにあたり，それぞれの著者は，その神学的，歴史的，社会的関心に最も合ったものを使い，その記述に個人的な刻印を残した。各福音書において，第一に民衆に，そして次に彼らが属する地域と社会に注意が向けられ，イエスがより広い社会的文脈の中で提示されている。イエスはほとんど例外なく，常に民衆の中に見られ，民衆のために存在している。その中には，弟子たちのように常にイエスと繋がっている者もいれば，イエスに救いを求める者として物語に頻繁に登場する者，サンヘドリンやパリサイ人のようにイエスと対立する者，ヘロデ・アンティパスやピラトのように物語の進行上，ほぼ偶然に登場する者や，その他物語全体を通して一度だけ現れる者もいる。そのうちの一人がアリマタヤのヨセフで，彼は当時のユダヤ人社会において重要な役割を果たしたにもかかわらず，４人の福音書記述者は全て，その物語の最後に，イエスの適切な葬儀に関するピラトへの要求に関するエピソードにのみ関連付けて記している。ヨセフはイエスの十字架上の死の話の後日談ように登場

するが，彼の行動はある意味イエスの死と復活をつなぐ話となっている[1]。つまり，ヨセフの行動に関する話は偶然全ての福音書に含まれたのではなく，イエスの復活というすべての福音の最高潮へと導く，もう一つの欠くことのできない一段階なのである。

聖書辞典では，ヨセフは通常非常に簡単に紹介され，４つの福音書の異なる情報をつなぎ合わせて一つのヨセフ像が形成されている。しかしその結果，希少な情報はそれぞれの福音書において見られる文脈を失ってしまっている。ヨセフの要求に関する話は，マタイ，マルコ，ルカ，ヨハネによって同じ手法で一般的な情報に大きな違いもなく記録されているが，各福音書におけるヨセフに対する見方には，ヨセフ自身というよりむしろその行動に関する著者たちの解釈を我々に伝えてくれる，多くの重要で，興味深く，特異とも言えるニュアンスと詳細が含まれている。以下，それぞれの叙述を個別に分析し，その相違点を比較する。

1. マタ 27:57-61 によるアリマタヤのヨセフ

> 57 夕方になると，アリマタヤ出身の金持ちでヨセフという人が来
> た。この人もイエスの弟子であった。58 この人がピラトのところ
> に行って，イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た。そこ
> でピラトは，渡すようにと命じた。59 ヨセフはイエスの遺体を受
> け取ると，きれいな亜麻布に包み，60 岩に掘った自分の新しい墓
> の中に納め，墓の入り口には大きな石を転がしておいて立ち去っ
> た。61 マグダラのマリアともう一人のマリアはそこに残り，墓の
> 方を向いて座っていた。 (マタ 27:57-61)

---

[1] G. R. Osborne, *Exegetical Commentary on the New Testament. Matthew*, Zondervan 2010, Grand Rapids, p. 1048.

マタイは物語の中でヨセフを，全ての行為（ピラトのもとに行くところから墓の入り口の前に大きな石を転がすところまで）を自ら引き受けた，ただ一人の登場人物として描いた[2]。この叙述の最後の節(マタ 27:61)には，墓の向かいに座っているが受け身の姿勢である二人のマリアが記されている。マタイは，ヨセフの行動が午後3時から5時, つまりイエスが十字架上で亡くなった時間と，夕方が始まり，闇が一日を終わらせる時間の間に起こったことを間接的に示している。ヨセフが夕方前に来たという情報は，イエスの磔の時にはその場にいなかったということを示唆しているのかもしれない。これに関して，モリスは次のように述べている。「イエスの信奉者のほとんどを隠れさせた十字架刑が，ヨセフには逆の効果をもたらし，彼を表舞台に引きずり出したことは，興味深い」[3]。ヨセフが初めに誰かからイエスが十字架刑になったことを聞き，それからエルサレムに行くことにしたのか，それとも過ぎ越しの祭りを祝うためにエルサレムに来て, その後イエスの磔を知ったのかは, 議論の対象となっている。エルサレムとアリマタヤの間の距離はおよそ 45km で，徒歩で 2 日，動物を使った移動でも 1 日はかかることから，二つ目の提案のほうがより受け入れられている。アリマタヤはユダヤの町で，カイサレアのエウセビオスによってラマタイム・ツォフィムと同じであるとされた(*Onomasticon* 144:28-29)。エウセビオスのこの町の記述は簡潔である。「*Armthem Seipha (Sofim)*。エルカナとサミュエルの都市。ディオスポリス（現在のロード）の近くに位置する。福音書のアリマタヤから来たヨセフの出身地。」

ヨセフの第 1 番目の特徴は，ユダヤ社会における物質的な地位に関するものである。アリマタヤのヨセフは金持ちであり，このことから彼が葬儀にかかる費用を賄ったことが直ちに説明できる。(マタ 27:59-60)。また，彼自身の町ではなくエルサレムに墓をもっていることも説明できる。これはまた，暗にヨセフ

---

[2] ヨセフはイエスの葬儀の精神的な行為者であったとさえ考えられ, 実際は一人で行ったわけではなかったのだろう。「大きな石を転がす」という情報は，この作業に複数人が関与していたことを暗示している。

[3] L. Morris, *The Gospel According to Mathew*, Eerdmans1992, Grand Rapids, p. 728.

の熱望を表している。なぜなら，費用の問題だけではなく，審判の日に関するユダヤ人共通の信念のため，エルサレムの外に住んでいる非常に信心深い（そして裕福な）ユダヤ人だけがエルサレムに埋葬されることを望むからである。その審判は，ヘブライ語聖書によれば，エルサレムの壁の近くにあるケデロンの谷の一部である，ヨシャファトの谷で行われるのである(ヨエ 4:2)。エルサレムの近くに墓を持つことは，熱心なユダヤ教徒にとって有利なことだと考えられていた。

しかし，ヨセフに関する情報で最も重要なものは，ナザレのイエスとの関係である。マタイによれば，ヨセフはイエスの弟子であるが，十二使徒の一人ではなく，使 2:23 を考慮に入れれば，初めからイエスと行動を共にしたうちの一人でもないことがわかる。この情報は，ヨハネを除けば，4 つの福音書に言及されている弟子の中で唯一，イエスの磔の時に逃げ出すどころか，むしろ不安な状況においてエルサレムに来たヨセフの行動に新しい光を投げかけるものである (マタ 27:57)。マタイの物語は，ヨセフがすでに決められた目的のためにエルサレムに来たことを示唆しているかのようである。もしそうであるなら，ヨセフの行動はイエスに対する献身と尊敬を表し，それはイエスの遺体を適切に埋葬した時に現実の行為として具現したものである。ヨセフの目的の実現にはいくつかの作業が含まれていた。まず第一に，イエスの遺体の引き取りを要請するため，ピラト・ポンテオスのところに行く必要があった。この要請は通常のことではなかった。なぜなら，ローマに抵抗した政治的な罪で処刑された罪人は，自然に朽ち果てるまで十字架上に放置されなければならなかったからである。たとえそれが安息日の前日で過ぎ越しの祭りの始まりの日だったとしても，その場合，遺体は日没前に十字架から外されなければならず，イエスの遺体は公共墓地に埋葬されることになる。ヨセフは自分と家族のために作った墓を使ってでも，イエスに適切な葬儀を施したいという強い決意を持っていたようである。しかし，ヨセフが簡潔であっても切な葬儀の準備を行う前に，まずローマの権力者たちにイエスの遺体を引き渡してくれるよう要求しなければならなかった。ヨセフの嘆願に関する記述は概略的でしかなく，二つの簡潔で

短い文に縮約されている。初めの文はヨセフがピラトのもとを訪れ，イエスの遺体の引き渡しを要求したことを読者に伝えている。2 番目の文はイエスの遺体をヨセフに引き渡すよう命じたことが簡単に述べられているだけである。マタイはヨセフとピラトの間の会話をできるだけ読者に伝えたくないかのように見える。そしてそれこそがより精詳細な叙述の代わりに二つの短い文に限ったことの理由であると思われる。

ピラトがヨセフにイエスの遺体を引き渡した確かな理由を立証するのは難しいが，4 つの可能性が考えられる。

第 1 の可能性は，ピラトのほうにイエスへの憐れみがあったというものである。それはイエスの裁判の記述(マタ 27:11-26) に基づいており，そこでマタイは，ピラトがイエスの状況を理解し (マタ 27:18) ，イエスに好意を示した (マタ 27:23)ことを記している。マタイによれば，ピラトはイエスのためにサンヘドリンや群衆と戦う危険を冒したくなかったとしても，何らかの理由で（これはおそらくマタ 27:19 で意図されている）イエスを「高潔な人物」であると考えていた。このイエスへの評価は，このような場合に予想されるべきイエスの死亡確認もなく，直ちにイエスの遺体を引き渡した理由となるだろう。

第 2 の可能性は，社会政治的な性質を帯びるものであり，すでにイエスの一件により起こっていた，過ぎ越しの祭りの期間に起こったエルサレムでの暴動を指している。イエスの裁判の間，ピラトはサンヘドリンや群衆との口論に巻き込まれており，それがエルサレムに駐留していたローマ軍への反感を高めていたかもしれない。このような理由から，ピラトは単純にヨセフの要求に応じることでイエスの件に関連して起こりうる，別の問題を回避しようとしたのかもしれない。

第 3 の可能性は，マタイの叙述戦略と見ることである。ピラトはイエスの一件関与していたものの，マタ 27:19 に記された文によって示されているように，マタイにより，「脇に立つ者」と表現されている。これにより，ピラトをイエスの死に対する直接的な責任から回避させており (マタ 27:24)，マタイはユダヤの民に責任を負わせた (マタ 27:25)。マタイはピラトについて同様の記述を，

ヨセフの要求に関する叙述でもしている。つまりピラトは，適切な葬儀に関するユダヤの慣習を破るかもしれないことに対する責任がないことを示すことで，許可を与えることに障害を見出さなかった。

第 4 の可能性は，賄賂が関与している疑いに由来する。マタイはヨセフを「アリマタヤ出身の金持ち」でイエスの弟子であると紹介しており，ヨセフは法的な障害があったにもかかわらず，イエスの遺体を難なく渡してもらえたことを記述している。フラフィウス・ヨセフスのピラトに関する記述には，彼が犯した多くの罪の中に賄賂が含まれており，このことが，賄賂が一定の役割を果たした可能性を補強する。

ヨセフに関する叙述の 2 番目の部分(マタ 27:59-61)は，ピラトからイエスの遺体を受け取った後の遺体の扱いについて書かれている。マタイはヨセフの 3 つの行動を短く記している。1 つ目はピラトの指示の後イエスの遺体を受け取ることだった (マタ 27:59)。墓のある場所まで運ぶのに少なくとも 2 人は協力者が必要だっただろう。おそらくヨセフはこのために人を雇っただろうが，それは彼がその場にいなかったことを意味するのではない。なぜなら，墓の場所を指示しなければならなかったからである。

2 つ目の行動は，イエスの遺体を清めて墓まで運ぶことである。マタイの記述は，墓に運ぶ前にイエスの遺体を清め，亜麻布で包んだことを示しており，それは水が使えるところで行われたはずである。ここでもまた人との協力が必要になる。最も可能性が高いのは，マグダラのマリアともう一人のマリアという女性たちが関与していたことであり，彼女たちについてはこの叙述の最後(マタ 27: 61)にマタイが記しているが，彼女たちは墓の中にイエスの遺体が納められるまで葬儀に参加していた[4]。

3 つ目の行動は，イエスの遺体を墓の中に安置することである。この時イエスの遺体を埋葬したのはヨセフの家の墓であり，それが新しい墓であることがわかる。ヨセフの家族でこの墓に埋葬された者はまだいなかった。新しい墓で

---

[4] マグダラのマリアともう一人のマリアはイエスの復活の物語に再び登場する (マタ 28:1)。

あるという情報は，イエスの死と復活に関するマタイの叙述戦略における一つの機能であると考えることができる。すなわち，ここでの最も重要な要素は，イエスが蘇った時に遺体がなかったということである。また，死体と共に過ごすと生きている人間が不浄になるということがユダヤ教の宗教的確信として背景にあることも重要だろう。その墓が「新しい」という情報は，間接的にそれが家族の中の多くの者のための墓であり，一つの墓ではないことを示している。たいてい家族の墓地は，いくつかの部屋と納骨のための空間を備えた広いものであった。さらに，墓は岩に掘ったと書かれているが，それは高価で贅沢なものであることを示している。この種の墓は通常岩に掘った浅い溝に沿って横向きに転がされる車輪型の石によって閉ざされた[5]。それは墓荒らし（度々起こった）を防ぐためであったが，とりわけ人が骨や遺体まで納めるのに使ってしまうこと（より一般的な犯罪）を防ぐためであった。Semakhot13:5 には次のように書かれている。「墓の中で遺体を見つけた者はその地点（場所）が彼（故人）に貸し出されたものであることを知らない限り，それを動かしてはならない」。この規定はいわゆる「仮の埋葬」あるいは「仮の墓／墓場」のことを指しており，それは埋葬の準備ができていない突然死の場合や，家から遠く離れたところで亡くなった人の場合に時々起こった。そのような場合，遺体や骨は家の墓に運ぶために初めの埋葬地から移動させることができる。しかし，そうでなければ，墓の持ち主は遺体や骨を自分の墓から移動させることができない。イエスの場合，ヨセフの行動は一種の仮埋葬であり，そうした理由として最も考えられるのは，彼がイエスの弟子だったからというだけではなく，イエスの遺体が公共墓地に埋葬され，ガリラヤの家族の墓に埋葬されるのが不可能になることを防ぐためであろう。このことがヨセフの行動をイエスの弟子であるというだけではなく，徳のある人物としての高潔さを示す最大の証拠となる。ヨセフのこの側面は，ヨセフに関する叙述におけるマタイの最後の言葉，「立ち去った」 (マタ 27:60)によって強調されている。この言葉は，12 使徒が聖霊による

---

[5] J. Nolland, *The Gospel of Matthew*, Eerdmans, Grand Rapids 2005, p. 1232.

洗礼を受けるよりずっと以前に，ヨセフがイエスの真の弟子であったという評価を最も的確に要約している。たとえ彼が十二使徒の一人ではなくとも，（ヨハネという一部の例外はあるが）最後まで主人に忠実であった唯一の弟子としてマタイによって提示されている。

結論

マタイによるアリマタヤのヨセフについての叙述は，特定のエピソードを表した一つの短い物語という以上のものである。この考察の根拠となるのは，ヨセフが十二使徒の 1 人ではないものの，やはりイエスの弟子であるという事実である。マタイはヨセフを，主人を見捨てた十二使徒とは異なり，絶望と苦難の時に正しく行動した人物として描いている。それは，メシアとしてのイエスに対する真の信仰について間接的に読み手に伝えたいという，マタイのメッセージを含んでいる。これは，特別に選ばれた者であることよりも，信じる者の信仰心のほうがより重要であることを示唆している。マタイはヨセフの事例を，イエスへの真の信仰に関する遠回しな教えを与えるために使ったのである。

2. マコ 15:42-47 によるアリマタヤのヨセフ

> 42 既に夕方になった。その日は準備の日，すなわち安息日の前日
> であったので， 43 アリマタヤ出身で身分の高い議員ヨセフが来
> て，勇気を出してピラトのところへ行き，イエスの遺体を渡して
> くれるようにと願い出た。この人も神の国を待ち望んでいたので
> ある。44 ピラトは，イエスがもう死んでしまったのかと不思議に
> 思い，百人隊長を呼び寄せて，既に死んだかどうかを尋ねた。 45
> そして，百人隊長に確かめたうえ，遺体をヨセフに下げ渡した。

46 ヨセフは亜麻布を買い，イエスを十字架から降ろしてその布で
巻き，岩を掘って作った墓の中に納め，墓の入り口には石を転が
しておいた。47 マグダラのマリアとヨセフの母マリアとは，イエ
スの遺体を納めた場所を見つめていた。 (マコ 15:42-47)

アリマタヤのヨセフに関するマルコの叙述(マコ 15:42-47)は，ヨセフの行いの日時を示すことから始まっている。安息日の準備の日であるという情報から，それが金曜日の午後遅く，日の入りにはまだ時間がある時であることがはっきりとわかる。次にアリマタヤ（ユダヤの都市）の市民であるヨセフを紹介する。マルコによれば，ヨセフは議会の重要な一員であり，このことは彼が単にサンヘドリンの一員であっただけでなく，強い影響力を持った人物であったことを意味する。こうしてマルコは彼を力のある者として提示している。この社会政治的な提示は，ヨセフが神の国を待ち望む熱心なユダヤ教徒であるという彼の信仰に関する特質と表裏一体をなしている。「ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ 神の国」ということばは様々な解釈を許すが，最も本質的なことは，神の支配を表す名詞 βασιλεία を，特定の時，場所，出来事あるいは事情などに一切言及することなく，理解することである[6]。マルコによれば，ヨセフは「ἦν προσδεχόμενος τὴν βασιλείαν τοῦ θεου 神の国を待ち望んでいた」のであり，このことは彼にとって神の国がこの先訪れる未来にある物であることを示唆している。従って，彼が神の国を考えていたという時に，それがユダヤ教第二神殿に基づいていたものなのか，洗礼者ヨハネとナザレのイエスによる宣言に基づいていたものなのか定かではない。マルコが直接的に彼を弟子として，あるいはイエスの信奉者としてさえ描いていないという事実に鑑み，これらの二つの可能性のうち第一のものがより適切であろう。

ヨセフを登場させた後，マルコは彼がピラトにイエスの遺体の引き渡しを願い出たという叙述へと繋いでいる。不思議なことにマルコはヨセフがピラトの

---

6 R.T. France, *The Gospel of Mark,* Eerdmans, Grand Rapids 2002, pp. 92-93.

ところへ「勇気を出して行った」と述べている。マルコによれば，サンヘドリンはイエスを放免しようとしたピラトに反対した(マコ 15:6-15)のだが，ヨセフがその一員であったということを考慮に入れると，これは奇妙な陳述である。ピラトによるイエスの裁判に関するマルコの叙述では，行政長官の試みが失敗に終わったことが記されているが，イエスの件についてピラトはかなり消極的な態度を見せて，群衆が主導権を握ることを安易に許した可能性が考えられる。

イエスの遺体を引き渡すことに関する次の記述(マコ 15:44-44)ではヨセフが「勇気を出した」ということを確かなものにしているようには思えない。驚いたことに，マルコはヨセフの「勇気ある」行動よりもむしろピラトの反応の方に注意を向けている。マルコによれば，ピラトはイエスが既に亡くなっていると聞いて驚き，百人隊長にヨセフの証言を確かめさせた(マコ 15:44-45)ので，恐らく疑いを持ったのであろう。ピラトが，イエスが既に亡くなっていると知り驚いたのに，イエスの死の真偽を確かめるために百人隊長を送ったことは興味深い。このことは，ピラトがヨセフの証言を信用していなかったことを示唆し，さらにそのことがピラトとサンヘドリン(ここではヨセフによって代表される)との関係の特徴を暗に示している。フラフィウス・ヨセフスは，十字架に架けられた三人の男達が生きている間に十字架から降ろされ，そのうちの一名が生きながらえたという出来事を書き記している(*Vita* 75:421)[7] 。このことから，死人の遺体を親類に引き渡す前に，罪人の死を確認するのが正式な手続きであったことが窺える。しかしマルコがイエスの葬儀の記述にこうした詳細を含めた理由は社会政治学的な目的ではなく神学的な目的にあると見るのが極めて自然である。すなわち，イエスの復活という事実を強調するためである。イエスが本当に死んでそののち死から甦ったのだ(マコ 16:6)。イエスの死を確認したのち，ピラトはそれ以上問うこともなく，埋葬のためにイエスの遺体を十字架から降ろすことの許可をヨセフに与えた。イエスの埋葬の過程におけるヨセフの行動に関するマルコの叙述は独特の繋がりを持っている。ヨセフはまずイエス

---

[7] G.A. Evans, *Mark 8:27-16:20*, Thomas Nelson, Mexico City 2000, p. 520.

の体を十字架から降ろすための許可を得るべくピラトの元に赴き，次に亜麻布を買い求め，その後イエスの遺体を十字架から降ろして亜麻布で包み，そして岩を掘って作った墓に納めた。ヨセフの最後の行動は墓の入り口を塞ぐように石を転がすことだった。マルコはこの墓がヨセフの物であるかどうかを具体的に語ってはいないが，そのように想像される。イエスの埋葬に関するマルコの叙述の最後には，マグダラのマリアとヨセフの母であり，同時にヤコブの母でもあるマリアについての情報がある。(マコ 15:40; マコ 16:1) これら二人の女は，他の女たちと共にイエスの十字架へのはりつけを目撃し(マコ 15:40-41)，そして週の最初の日における女たちの集まりの中にもいた。

結論

マルコの叙述に従えば，ヨセフはサンヘドリンの一員であり，来るべき神の国を実現するための方法としてイエスを見ていたのかもしれない。残念ながら，マルコはヨセフの行動の理由を説明していない。それは，ヨセフがある程度イエスの信奉者であったからなのか，あるいは，サンヘドリンの(極めて少数の)構成員はイエスをユダヤ教に対する脅威と考えていなかったのだが，ヨセフもその一人であったのか。イエスの遺体を引き渡して欲しいとピラトに願い出たヨセフの行動はマルコによって「勇気を出して」と記されているのだが，これはヨセフがサンヘドリンの他の構成員とは異なり，より良い人物であることを示している。イエスの葬儀に関するマルコの叙述の目的は，サンヘドリンが，イエスを救うためにほとんど何もしなかったにもかかわらず，そのすべての構成員がイエスと敵対していたというわけではないということを伝えたかったように思える。

3. ルカ 23:50-56 によるアリマタヤのヨセフ

> 50 さて，ヨセフという議員がいたが，善良な正しい人で，51 同僚の
> 決議や行動には同意しなかった。ユダヤ人の町アリマタヤの出身
> で，神の国を待ち望んでいたのである。52 この人がピラトのとこ
> ろに行き，イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出て，53 遺
> 体を十字架から降ろして亜麻布で包み，まだだれも葬られたこと
> のない，岩に掘った墓の中に納めた。54 その日は準備の日であり，
> 安息日が始まろうとしていた。55 イエスと一緒にガリラヤから来
> た婦人たちは，ヨセフの後について行き，墓と，イエスの遺体が
> 納められている有様とを見届け，56 家に帰って，香料と香油を準
> 備した。婦人たちは，安息日には掟に従って休んだ。(ルカ 23:50-
> 56)

アリマタヤのヨセフに関するルカの叙述(ルカ 23:50-56)は，彼の名前と社会的地位を示すにとどまらず，彼の道徳的・倫理的な姿勢についても語るところから始まっている。ルカによれば，ヨセフはサンヘドリンの一員であるが，恐らく最も重要な地位にある者ではなかったであろう(ルカ 23:50)。このため，ルカは，ヨセフがサンヘドリンによるイエスの扱いを受け入れておらず，イエスを糾弾することや彼をローマ人に引き渡すことに反対していたことを述べることで，ヨセフに対する謝罪の気持ちのようなものを表している。この情報はサンヘドリンの前で行われたイエスの裁判の間，ヨセフもそこに居たことを示唆するかも知れない(ルカ 23:66-23:1)[8]。

ヨセフの道徳的・倫理的評価に関して，ルカは彼が「善良な正しい人」(ルカ 23:50)であり，神の国の到来が間近であると期待していたと述べている (ルカ

---

[8] Garland はこのことがルカによって明確に述べられているとは考えていない。D.E. Garland, *Exegetical Commentary on the New Testament. Luke*, Zondervan, Grand Rapids 2011, p. 938.

23:51)[9]。ヨセフのことを善良な正しい人と形容することで，ルカは幼少期の物語の中で登場する善良な正しい人たちと同じような位置付けをしている (ルカ 1:6; ルカ 2:25; ルカ 2:37)[10]。このようにして，ルカはヨセフの敬虔さを強調している[11]。ルカは，ヨセフを善良な正しい人だと評価したことを，彼がイエスの一件でサンヘドリンと対立していたことに直接繋げている。ヨセフの敬虔さが彼の対立の中心的な理由であると言えるかもしれない[12]。ヨセフが敬虔であることは間接的に彼の生まれ故郷である都市，アリマタヤに関連する。この都市は恐らく旧約聖書でラマタイム（ツォフィム）と呼ばれた，預言者サムエル (サム上 1:1.19)の町と同じ場所であろう。ルカは，アリマタヤという都市がユダヤ人の都市で，そこではユダヤ人がユダヤ教の掟に従って暮らしていたということを強調している[13]。

ヨセフを登場させた後，ルカはヨセフの行いについて物語を書き進めていく。ヨセフの最初の行いは，イエスの遺体を引き渡してもらうよう頼むためにピラトのところへ行ったことである (ルカ 23:51)。ヨセフだけがイエスのきちんとした葬儀のことを気にかけていた事実を強調することで，ルカは十二使徒たちの誰一人としてヨセフの行ったことをしなかった事実へと注意を向けさせていたのかもしれない。ルカは直接的にヨセフがイエスの弟子の一人であるとは述べておらず，むしろヨセフがモーセの律法に従って暮らす敬虔なユダヤ人であ

---

[9] この道徳的評価は当該の物語の特殊な状況の中に埋め込まれているが，ヨセフの徳は彼の人生の全てに関わっており，単にこの場面に限られるものではない。 A. Plummer, *The Gospel to S. Luke*, T&T Clark, Edinburgh 1981, p. 540.

[10] L.T. Johnson, *The Gospel of Luke*, Liturgical Press, Collegeville 1991, p. 383.

[11] I.H. Marshall, *The Gospel of Luke*, Eerdmans, Grand Rapids, p. 879.

[12] このことは，イエスを断罪し，ローマ人に引き渡すというサンヘドリンの決定は全員の合意に基づいたものではなかったことを直接的に表している。J.T. Carroll, *Luke. A commentary*, Westminster John Knox Press, Louisville, 2012, p. 472.

[13] Geldenhuys はヨセフがアリマタヤという都市の市民であったにもかかわらず，エルサレムに住んでいたと主張している。それはサンヘドリンの一員であることは彼がいつでも呼び出される態勢にあることを要求されるからである。アリマタヤはおよそ 45 キロ離れているため，サンンヘドリンの一員であるためには首都に住むことが要求されていたであろう。N. Geldenhuys, *Commentary on the Gospel of Luke,* Eerdmans, Grand Rapids 1956, p. 620.

り，神の約束，すなわち神の国の実現を待ち望んでいたことを示唆している。ここで「神の国」ということばが第二神殿時代のユダヤ教における待望として理解されるべきなのか，あるいはメシア活動の終末論的願望として理解されるべきなのか，判断するのは不可能である。ルカはヨセフの要求に対するピラトの反応について何も語っておらず，ピラトが肯定的に答えたことは次に続く叙述からのみ推し量ることができる。ヨセフは適切な葬儀を行うためイエスの遺体を十字架から降ろす許可を得たのである(ルカ 23:52)。ルカの叙述によれば，イエスの埋葬は三つの連続した出来事に集約される。遺体が十字架から降ろされたこと，遺体が亜麻布で包まれたこと，そして遺体がまだ使われていない墓の中に収められたことである。これらの出来事はどれも複数の人間の助けを必要とするが，ルカは一貫して三人称単数の代名詞を使っている。イエスの埋葬に関する叙述の最後で，ルカはイエスの葬儀の日が安息日の前日であったことを示している (ルカ 23:54)。

イエスの葬儀に対するヨセフの貢献の叙述はイエスの死と埋葬の日に関する情報で終わるのだが，ルカは追記として(ルカ 23: 55-56)イエスの復活(ルカ 24:1-8)の叙述でも再び登場する女性たちの存在を書いている。イエスの復活がイエスの埋葬に直接繋がっているのである。ルカはこれら女性たちを名指ししていないが，イエスと共にエルサレムにやってきたガリラヤ出身の女性たちと記している[14]。 これらの女性たちは墓までヨセフやその同伴者（たち）の後に従ってきたようである。なぜなら，安息日の後で彼女たちはその墓を見つけることができるからである。しかし，とりわけ興味深いのは，これらの女性たちが単に墓の場所だけでなく，「イエスの遺体が納められた様子」をも心に留めたというルカの情報である。これはつまり，彼女たちが墓所に入り，墓のどの場所に遺体が納められたかを知ったということを意味する。この情報は彼女たちが遺体に香油を塗る儀式を執り行うために重要であった。すでに安息日の始まりに差し掛かっていたために時間がなく，イエスの亡くなったその日にこ

[14] 女性たちの名前はルカ 24:9-11 において示されている。マグダラのマリア，ヨハナ，そしてヤコブの母マリアである。

れらのことを執り行うことができなかったのである。 このようにして，ルカはアリマタヤのヨセフに注目させておいた後に，イエスの復活に際して主役となるガリラヤから来た女性たちへと自然な流れで推移していくのである。

結論

イエスの埋葬とそれに対するヨセフの貢献についてのルカの叙述は，個々の断片的な情報が奇妙な順序で集められているように思える。それは恐らく，年代学的な目的ではなく神学的な目的のために用いられた異なる情報源から編纂された結果であろう。イエスの埋葬に関するルカの叙述が持つ主な神学的論点は，ヨセフの敬虔さを示すことで，彼に正しいことをさせた，つまりイエスの遺体に対して適切な葬儀を保証したということである。

4. ヨハ 19:38-42 によるアリマタヤのヨセフ

> 38 その後，イエスの弟子でありながら，ユダヤ人たちを恐れて，そ
> のことを隠していたアリマタヤ出身のヨセフが，イエスの遺体を
> 取り降ろしたいと，ピラトに願い出た。ピラトが許したので，ヨ
> セフは行って遺体を取り降ろした。39 そこへ，かつてある夜，イエ
> スのもとに来たことのあるニコデモも，没薬と沈香を混ぜた物を
> 百リトラばかり持って来た。40 彼らはイエスの遺体を受け取り，
> ユダヤ人の埋葬の習慣に従い，香料を添えて亜麻布で包んだ。41 イ
> エスが十字架につけられた所には園があり，そこには，だれもま
> だ葬られたことのない新しい墓があった。42 その日はユダヤ人の
> 準備の日であり，この墓が近かったので，そこにイエスを納めた。
> (ヨハ 19:38-42)

イエスの埋葬とアリマタヤのヨセフの関与についてのヨハネによる叙述は共観福音書のそれとは著しく異なっており，そのことから，共観福音書の伝承とは異なる伝承を残していると思われるため, とりわけ重要なものになっている。ヨハネによる解釈には共観福音書においても与えられた情報が含まれているにもかかわらず，ヨハネにおける総体的な記述は，異なる物語を語っているばかりか，新しい結論を導き出している。

ヨハネの叙述に見られる最初の相違点は二人の主人公の存在である。第一の人物はアリマタヤのヨセフで，ピラトからイエスの遺体を引き取るという出来事の主人公である(ヨハ　19:38)。ヨハネは彼をイエスの弟子の一人ではあるが，ユダヤ人の隣人たちの反応を恐れて，未だそのことを公にしていない弟子として描写している。 この情報はヨセフが弟子であること(ヨハ 19:38)の意味に直接関係してくるが，忠実で熱心な弟子と見ることはできず，心からの関与を欠いているイエスと彼の教えの信奉者にすぎないと見做してよいであろう。ここでヨセフは，イエスについての尊敬の念とユダヤ人たちに対する恐れとの間に挟まれた人物として描写されている。ということは，ピラトの所へ行きイエスの遺体を求めたという彼の行動は驚きをもって見られなければならない。なぜならば，彼はユダヤ人の隣人たちを恐れていたが，一人のローマ人の官吏には恐れを抱かなかったからである。 ヨハネは，ヨセフとピラトの会話の叙述を省いており，すぐに，ヨセフの嘆願が許された後の成り行きへと進んでいる(ヨハ 19:39)。ヨセフは公にはイエスの弟子ではなかったが，ヨハネの叙述の中で，イエスが磔にされた後，彼の遺体の埋葬のことを気遣った唯一の人物である。このことは，要するに十二使徒に向けられた強い非難ということになる。

描写が進むにつれ，ヨハネは彼の叙述における第二の主人公，ニコデモを登場させる (ヨハ 19:39)。きちんとした埋葬のためにヨセフがイエスの遺体を引き取る許可を得た後に，ヨハネは，パリサイ人でユダヤ人の首領であるニコデモを登場させる。ニコデモは時折イエスと交流を持っていた(ヨハ 3:1)が，適切な聴問なしにイエスを咎めるべきではないと強く主張しており，イエスの支持

者であると考えられていた(ヨハ 7:50-52)。イエスの葬儀にまつわるヨハネの記述において，イエスの遺体が墓に埋められる前の適切な準備の世話をしたのはニコデモであった。この叙述によれば，没薬と沈香を大量に使った儀式はヨセフとニコデモだけで執り行われた。その際，ニコデモは百（ローマ）ポンド（今日では約 33kg）の没薬とアロエを提供した(ヨハ 19:39)のだが，一人の葬儀に使われる量としては極めて大量であった。そのことはまた，そのような量を運ぶにはニコデモに助けが必要であったであろうことを暗に示している。

二人の主人公を登場させた後，ヨハネは彼の叙述の中で，二人に準備を共同で行わせた。それは，イエスの遺体に塗油を施し，香料とともに亜麻布に包む作業を含んでいた。ヨハネはこのことがユダヤ教の埋葬の習慣にきちんと則った形で行われたことを読者にはっきりと伝えている(ヨハ 23:40)。 イエスの遺体を墓に埋めるための準備に関する叙述の結末において，ヨハネは墓がどこに設けられていたかについての情報をいくらか提供している。この点で，ヨハネは共観福音書とは異なり独特である。ヨハネによると，イエスの磔の場所は園の中であり，またそこにはまだ使われたことのない新しい墓が存在していた(ヨハ 19:41)[15] 。物語はその墓が誰のものであったかについて何も語っておらず，墓の所有の問題は推測を余儀なくさせている。物語はそれ自体墓の所有者がヨセフかニコデモであるかについて，直接的にも間接的にも示唆していない。ヨハネにとって，その問題はほとんど興味の対象でなかったようだ。この物語の最後の節は，安息日の前日であったことを示しており，そのことは，こうした状況がゆえにヨセフとニコデモにとって使用できるもので，かつ磔の場所の近くにあった墓にイエスの遺体が葬られたことを強く示唆している。

---

[15] ヨハネの叙述は，その園の名前を示していないという点でいささか不可思議である。M.M. Thompson, *John. A Commentary*, Westminster John Knox Press, Louisville, 2015, p. 406.

結論

イエスの遺体の埋葬に関するヨハネの叙述では，十二使徒やイエスの復活 (ヨハ 20:1-2)において, 墓の場所を知っていたと思われる女性たちのことには触れられていない。このことはヨハネの叙述をいささか曖昧にしている。しかし，ヨハネにとってもっとも重要な要素は，アリマタヤのヨセフとニコデモを，イエスの信奉者でありながら，公にはまだ弟子ではないにもかかわらず，ユダヤ教の埋葬の習慣に則ってイエスの遺体が正しく埋葬されるよう取り計らった男たちとして描写することであった。ヨハネの叙述の方策の理由として考えられるのは，肉体を，永遠の魂を求める一時的な物質でできた「牢獄」であるとする当時のグノーシス主義の考え方に対抗して，肉体の尊厳と価値を強調する意図があったのではないだろうか。キリスト教の教えにおける肉体の重要さはイエスの復活の物語において最も巧みに描写されている。

おわりに

四つの福音書におけるヨセフに関する主要な相違点

トピック	マタイ	マルコ	ルカ	ヨハネ
裕福な男	肯定	肯定していない	肯定していない	肯定していない
サンヘドリンの一員	肯定していない	肯定	肯定	肯定していない
イエスの弟子	肯定	可能性がある	可能性がある	肯定
ピラトのところへ行った	肯定	肯定	肯定	肯定
遺体を包んだ	肯定	肯定	肯定	肯定
彼自身の墓であった	肯定	肯定していない	肯定していない	肯定していない
香料	肯定していない	肯定していない	肯定していない	肯定
園にある墓	肯定していない	肯定していない	肯定していない	肯定
女性たち	肯定	肯定	肯定	肯定していない
単独行動	肯定	肯定	肯定	肯定していない

Joseph of Arimathea
His Literary Presentation in the Four Gospels-

Janusz KUCICKI

This study concerns Joseph of Arimathea, who appears as a merely passing character, despite the fact that he is mentioned in each of the Gospels. He is also connected exclusively with the narratives of Jesus' burial (Mt 27:57-61; Mk 15:42-47; Lk 23:50-56; Jn 19:38-42), and his name does not appear outside this particular narrative. In this study we present an analysis of each of the narratives concerning Joseph of Arimathea in order to show the similarities and differences between the four narratives.